

第八号

# よしおか ファミリー広報

発行日  
平成30年3月1日

発行所  
よしおか葬祭(株)  
室蘭市中島本町  
1-12-14  
TEL 45-3727

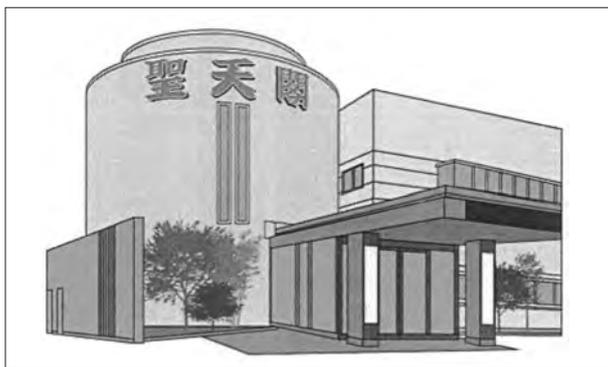
## 百周年にあたり

年が明け、寒さが一層増して来る時期となりました。

皆様には如何お過ごしでしょうか。昨年を振り返って見ますと、七月は低気圧の影響により天候不順が続き、農作物の生長にも影響を受け、温暖化により漁業も不振、九月・十月には、大型暴風による被害が発生、衆議院選挙があり、十一月には例年より早めの寒波到来しました。

さて、よしおか葬祭株式会社も皆様のご愛顧を受け、大正六年五月以来、百周年を迎える事が出来ました。

輪西村ベシボツケで開業、以来昭和六十一年、聖天閣落成営業、平成八年宮の森四丁目にサンホープ宮の森を完成、斎場と共に仏壇、仏具、神具



店と花のよしおか、慶弔生花簞、アレンジ花、その他の販売を行っており、ご愛顧をいただいております、心から感謝申し上げます。今後は社員一同、一層の努力を重ね、皆様のご期待に添えるようにいたします。

# よしおか葬祭(株)創業百周年

## 聖天閣の特典

よしおか葬祭(株)の特典としては、よしおかファミリー会員制があり、葬儀祭壇の割引をはじめ、様々な割引制度があります。その他、アークスカードのポイント、全葬連、if(イフ共済)全国加盟店割引特典が受けられます。

当社には、全国葬祭業協同組合連合会認定一級・二級、葬祭ディレクター資格認定者、全葬連葬儀事前相談員資格者を取り揃えており、いつでも相談に応じることが出来ます。

館内には広い大ホール・中ホール・小ホール・和室・九名乗りエレベーター・浴室各階・喫茶・喫煙コーナー・着替え室。玄関の円型ホールは上が吹き抜

けに。天窓には故人を送るのに相応しい照明の光が灯っています。又、故人の送迎にはクライスラー(GM)洋型リムジン霊柩車、三十六名乗いすゞアークツシヨンバス型霊柩車。病院からのご遺体搬送車、一般会葬者用バスを取り揃えております。玄関脇には、右に松と青木。左に秋から冬には赤い実を着けるピザカンサツと松があり、故人・ご遺族を迎えます。又、駐車場の並木も桜・梅・オンコ・ツツジ・イチヨウ・モミジ・栗・柿・ハスカップ・サンショウ・雪柳・藤・竹・高野山松・アジサイ・俵グミ、その他色々の木があります。駐車場は百八十台のスペース取りそろえております。

## 現代の葬儀と簡素化された納骨

近年、葬儀の考え方が変化してまいりました。特に都市部より地方へと急激な変化をしており、家族の考え方、見かたも本来の葬儀とは何かを置き忘れて来ているように思います。

家族に迷惑をかけたくない。親戚も歳を取り少なくなっている。友人・知人・近所付き合いも少ない。子供も遠方

にいる。お金もかけたたくない。色々なお考えによって益々小規模化へと向かっております。

本来の葬儀とは、故人を尊び、無事にご浄土へ送り出す儀式です。本尊を信じ、先祖を敬い、父母・兄弟・姉妹を偲び、尊ぶ心から行われる儀式です。



相対的費用が安くても、

香典収入が無く、自己負担が大きくなり、終了後、自宅への参拝者の対応に追われることとなります。費用を抑える為にも葬儀事前相談資格者のいる当社へご相談下さい。相談員が丁寧、親切にご相談にのります。

## 墓地と人間の有り方

昨年(平成二十九年)室蘭市神代町墓苑に共同墓が建設・完成され、多くの方が関心を持っております。

老いてお参りも出来ない一人身の方、親族が遠方の方、金銭上墓を建てられない、子供がいない。それぞれ色々な事情により希望する方がおります。室蘭市では一体八千円とか聞いており、今後の墓地の考え方も変化するものと思

います。昔から墓は一人一墓とか、昭和に入り〇〇家之墓と言つて一家族が入る墓が増えてきました。墓そのものは先祖を、父母を偲び、尊び、思う心が入っています。お彼岸、お盆にはお墓参りをかかさず行ってきました。又、その外には山や川、海への散骨。航空や宇宙への散骨。お骨からダイヤモンドを造る。レンタル納骨堂などがあります。

故人が安全に安楽にご浄土で安住できますように願うものです。

## 人間の死と葬儀

我が国の葬儀式の起源を表している記録は、聖徳太子(六二二年没)の死からとも、聖武天皇からともいい伝えられ、歴史は一千年にも及んでいる。

しかし、今日の葬送形式は形骸化したとしても、人間の不安と苦悩の極地である死を安らぎへ転換する助けと教えの威力的ものがあつた。葬儀は庶民の宗教的欲求があつたから、今日の姿があると言え

る。葬儀は日本の文化であり、民族から安心まで、形から精神までの総合的文化である。人は現実的に参加し、安らぎを受ける。仏教の祖お釈迦様は、二千五百年前にインドのシカ族の王子としてご誕生になり、七歩歩き「天上天下唯我独尊」と指を差し言われたと伝えられております。これは人の上に人を造らず、人の下に人を造らず、人は皆平等であるとお示しになられました。

成長され、ある日お城の東の門から町に出ようとした時、歳おいた老人に合い、南の門から出た時、病気の老人を見て、西の門から出ると、葬送の列を見ました。お釈迦様二十九歳の時、お城を出て、出家の身となり、修業の道へと入りました。その後は「生老病死」人間の定められた運命を悟るために、修業を続けられました。現在の葬儀には、お釈迦様が修業末に悟られ、私達に伝え聞かせるお教として伝えられております。葬儀式には第一に、死における自己の解決。第二に、よりどころの生命観。第三に安心立命を願う人間解脱の願行であります。

葬儀は死と向き合う人間と、それを送る人間との宿命的なものでもあります。自己の恐怖に繋がり、信心の薄い現代社会には、解脱させたいと言う、願行や危機感が外在化し過ぎていけると言えるむきもあります。親を思い、家族を思い、尊ぶ心が葬儀式へ伝わることを願ってやみません。

# ウダツがあがる

めつきり春めいた、暖かい日差しが家の中へ明るく差し込んでいる。今日のお客は、毎月研修会の世話役をやっている佐藤さんである。「和尚さん、この間は高野山へ参拝にお連れ下さり、ありがとうございました」、あまり普段はしない正座をして、膝の前で両手をきちんとそろえ、深々とお辞儀をする姿はなかなか様になってる。

「門前の小僧翟らわぬ、お経を読む」のたとえで、毎回、研修生のお辞儀の仕方を注意されているのを見てみると、自然に体が覚えてしまうものらしい。「大勢と一緒に旅行でしたから、よけいお疲れになったでしょう」

ねぎらいの言葉と共に、和尚を見上げる佐藤さんの瞳は、少女のようにきらきらと輝いている。

「いや私は、高野山に慣れていくけど、お世話をしたあなた達こそ疲れたことでしょう」

和尚の言葉には、実感がこもっていた。団体旅行の世話ぐらい疲れることはない。見

れたるうに、いつ会っても明るく、屈託のない笑顔を見ると、和尚は安心する。

「でも、和尚さん。高野山の宿坊の精進料理は、ほんとうにおいしかったですね。あの味は忘れられない。お山の料理って季節によって変わるんですか」と、心で警戒しながら話すことにした。高野山の冬は格別寒い。かといって俗世界のように、鳥や獣の肉を焼いて食べるわけにはいかない。そこで昔から温かい精進料理を工夫してきた。たとえば「三品豆腐」。それは湯豆腐を、醤油とお酒と少量のキャの油を混ぜたタレに浸して、食べると体がポカポカしてくる。厳寒の二月二十二日には「法印昇進式」と言う重要な祝いの行事がある。その時のご馳走は、三品豆腐や盛豆腐、けんちん汁、精進蒸など、高野山にも春が来て、五月に入ると右楯花がピンク色の大輪の花を咲かす。この頃、宿坊に泊まると、筍の木の芽あえ、豆腐田菜、ごま豆腐、つくしのあえもの、山ぶきのしぐれなどが食べられる。

「私は食いしん坊だから、また行きたいです」

無心に喜ぶ彼女の笑顔を見てみると、和尚まで嬉しくなってきました。しばらく黙って

いた佐藤さんが、静かにお話しをしました。

「和尚さん、教育ってほんとうに難しいものですね」

和尚さん

「そりやそうさ、学校教育にせよ、家庭教育にせよ、これくらい大切で、しかも、気の長い仕事はない」

「実は、私の姪が大学を卒業して、商社に勤めて二年になる。この間、彼女に会ったら元気が無い」

「どうしたのと聞くと、最初の一年は張り切って、何事も修行だと思って、やってきたと言うんですが」

「ところが、いつまでたってもお客様のお茶の給仕や、書類のコピーばかり。こんなウダツのあがらないことは、イヤだと言うんです。こんな時、どう励ませばいいんですか」。

和尚は少し考えて「佐藤さん、ウダツって何か知っていますか」と尋ねた。

「ウダツとは、こんな字を書くんだよ」

昔の日本家屋には、太く長い梁が横に渡されていた。これが屋根を支え、この梁の上にあつて、棟木の重みに、じつと耐えている数本の短い柱がある。これをウダツと言う。

「姪御さんに言つてあげなさい。もし、このウダツが、こ

んなに重いのはイヤだと投げ出したらどうなる。屋根まで落ちてしまう」

「人の目に触れない所で、小さな働きが大きなものを支えるんです」

「よく分かりました」

彼女はホットしたようにならずいた。

「継続は力なりですよ」

「私は、家庭教育も継続しかないと思う。しつ前は、し、続けると言つて、子供は親のいうことは聞かず、親のまねをすぐしたがるものだ」

「しかも悪い事はすぐ真似る。だから親としては、良くいせを身に付けなくてはならない」

「とくに両親のどちらかが、いない家庭で一番大切なことは、子供を一人前の人間と認め、対等に付き合つてあげる。家計のことや、健康のこと、自分の悩みまで正直に、子供の相談相手として、打ち明け

ること」

「子供は、どんなに小さくても、自分が頼られたと分かること、たいした力を発揮するものです」

「そのためには、常日頃から親が正しい行動をして、子供に模範を示しておくことです。」

# 大悲

## 父母の恩十訓

「仏説阿弥陀經」とは自覚・覚他・覚行窮満これを名づけて佛となす。

自覚とは、自らを悟る、目覚めること

覚他とは、他を目覚めさせる

覚行とは、究極的に充ち満ちている窮満という

目覚める↓飲んで深く酔っぱらって、帰る道もわからなくなっても目が覚めると、自分の家に戻って寝ている。朝、気がつき目が覚めた。寝ているとは迷いに眠っていたと気がつくのが、目覚めということ。

自他↓他を目覚めさせる、多くの人を見覚め行が窮まり満ちていること。

覚行窮満↓これらを言います。不思議往生↓色も無し、形も無し、心も及ばず言葉も絶えたり



一、妊娠十カ月の間、血を分け、肉を領ち、子を守り育てる恩

二、月満ちて時来れば陣痛の苦しみを受けてくれる恩

三、生れ出る子の顔を見て、それまでの苦を忘れ喜んでくれる恩

四、乳を与え、育ててくれる恩、そのため、子が生まれた時の母の顔は花のようであったものが、子を養育すること数年に及べば容貌衰え、顔色憔悴する。

五、乾いた温かい処に子を寝かせ、自らは湿った冷たい処に臥して育ててくれる恩

六、子の糞尿を手ずから洗います、臭穢をいとわな

七、食物は親が自らの口に含み、甘い物を口移しに与えてくれる恩

八、子のためとあれば自ら悪業を造り、悪道に墮ちることを甘受してくれる恩

九、子が遠くに行けば、帰つて来るまでこれを憶い寝てもさめても心配してくれる恩

十、子に禍いあれば代わらんことを思い、己れ死して後は子の身を護らんと願うことに対する恩

## 無常とは

皆さん、よく聞く話に、こんなことがあります。「人間は誰でも死んで行くのだが、自分の死ぬ日も分かっていないから、良いようなものだが、もし死ぬ日が分かっていたら、誰も働く気になれない」

こんな話はチョイチョイ人の話に出て来ることであり死

ぬ日が分かっていたら、好きな事をして働く気など無なつてしまう。死ぬ話など縁起でもない、まあ、こう言いたいのが私達の日暮しでございましょう。

お釈迦様は繰り返して、人生の無常を説いています。無常とは常無しと書くのであります。人生はいつまで続くか分からない、そういう意味と取れます。

しかし、好きでも嫌いでも

み物をもとむるに、母にあらざれば飲まず、寒きとき、着物を加うるに、母にあらざれば着ず、暑きとき、着物をとるに、母にあらざれば脱がず。

母、飢えにあるとも、含めるを吐きて、子に喰わしめ、母、寒さに苦しむときも、着たるを脱ぎて子に被らす。母にあらざれば養われず、母にあらざれば育てられず、その揺籃を離るるにおよべば、十指の爪の中に子の不浄を食う、はかるに人々、母の乳を飲むこと、百八十斛とす、父母の恩重きこと、天のきわりなきが如し。

このように父母の恩はまことに広大なものです。

人はともすると報恩の道を忘れ、自分一人の力で今日を築きあげたように錯覚するのです。

いつも母は懷を寢床となし、母の膝を遊び場となし、母の乳を食物となし、母の情けを生命となす、飢えたるとき、食をもとむるに、母にあらざれば喰わず、渴けるととき、飲

やはり人は死ぬ時は死ぬのであります。

人生、憎いとか可愛いとか、損だとか、得だとか、それだけしか見えなくて過ごしてしまいます。

人生とは、それだけでは無いのです。

一生涯、正しく見つめゆくには、死の立場から振り返って見る必要があります。自分の生命の儚さは、悲しみや、絶望や、やけくその対象では

なく、生きる事の意義と喜びに巡り会うのが仏教の教えであり何と言つても無常は事実であります。その無常で、有限な世界におりながら、いつも無限の世界を望んで、うろまうしているのが私達の生活であります。

それを、時々には静かに振り返らなくてはならないのではないのでしょうか。

# 「修証義」若き道元禅師

青年僧道元が榮に渡り、寧波の天童寺にいた時、ある日の昼飯の済んだあと、病氣療養中の先輩を見舞うため、東の回廊を通って仏殿の前まで来ると、背は弓のように曲り、眉は鶴のように白い一人の老僧が、敷石の上に椎茸を一つ一つ並べて干しておりました。

見れば、典座の用和尚でありました。手に竹の杖をつき、暑いのに笠もかぶらず、汗だくになって仕事に余念がありません。その日は非常に暑く、敷石は焼けきつており、こんな時の仕事は若い人でさえ楽でないのに、七十歳近い老僧ともなるとまことに痛々しく、その姿を見て、道元は用和尚の側に歩み寄って「お歳はいくつになられましたか」とたずねると「今年、六十八歳だよ」と仕事の手も休めて用和尚は答えました。

「ご高齢のご老師がそんな仕事をなさらずに、誰か若い者にやらせてはいかがですか」と思いやりの言葉を述べますと「他は是れ吾れにあらざ」と（他人のしたことは私のしたことにはならぬ）まことに鋭

い一語がはね返ってきました。道元は胸にグサリと刺された思いだったに違いありません。

「まことにその通りであります。今日は格別暑い日ですが、少しお休みになられてはいかがでしょう。お身体にさわるといけませんから」と、いたわりの言葉をかけました。すると用和尚は毅然として「更にいずれの時を待たん（ひとたび去って還らぬこの時を待とうというのか）そう答えて仕事の手を休めません。まさに珠玉のような言葉、一語一語に凜とした響きがあります。こう言われると、もはや慰める術もありません。

道元は黙して立ち去るのですが、「廊を歩する脚下、潜かにこの職の機要たることを覚ゆ」と述べておられます。ここに修業の正しい在り方、真実の生き方が実によく示されているのです。

我が身を正す五戒とは次の五つの戒律であります  
不殺生戒（生きとし生けるもの

の生命を大切にすること）  
不偷盜戒（盗みや不正を犯さない）  
不邪淫戒（男女の道を乱さない）  
不妄語戒（嘘、偽りを言わない）  
不酤酒戒（迷いの酒や思想に溺れない）

## 「お稲荷さん」

お稲荷さんは「伏見稲荷」「豊川稲荷」さんが有名である。一般に稲荷大明神といつて、狐が本尊様のように言われているが、そうではない。

本尊様は「ダキニ天」という愛欲の神様である。狐はその家来であり、使いなのだ。「ほんとかね？」「疑い深いんだね。まだあるぞ、聖天さん」というのがある。

関西では「生駒の聖天さん」関東では「妻沼の歡喜天」さんが有名だ。聖天さんや歡喜天さんの本尊様は顔が像で体は人間であり、その男女が立って抱擁しており、性の歡喜の絶頂を表している姿である。

「お稲荷さんも聖天さんも、精氣を与えてくれ、商売繁盛に靈驗あらたかだと言う」

「へエー、知らなかった。そうと知っていたら、一度お参りに行こうかな」と  
元氣な声になった。現金なものである。  
さぶちゃんもまだ色気は抜けていないと見える。

「さぶちゃん、京都の清水寺を知っているかい」「ああ知ってるよ」  
「和尚、俺も知ってる、町内会の慰安で行ったことがある」  
「なんだ、為さんも知ってたかい、清水の舞台で有名だもの、あそこの官長をしていた、大西良慶さんと言う、お坊さんが聖天さんをとても信仰していた。百七歳まで生きた人なんだよ」「なんと長生きしたもんだ」

「この人は関東大震災のとき、深川の焼跡を毎日一人でもまわり焼けただれた  
一人一人の死体に線香をあげて供養をしたんだ」「じゃあ、そのころ東京にいたんだ」それから七十何年間、ずっと社会福祉事業つくしてきたお坊さんだ」

「偉い人なんだ」この人は清水寺の官長さんになっても身だつたがたしか、八十四才の時に初めて結婚をしました。「俺より十四才も上だ」「相手は寺で預かっていた、お嬢さんで三十才になる美しい人だそうだ」「なんと、うらやましい話だろう」「しかも八十六才のとき子供が生まれたんだ」「へーえ、すごい馬力です、それこそ聖天さまのおかげかなあ」「俺たちもあやかりたいよ」

和尚は二人のびつくりした顔を見ながらこう言った。「でもなあ、男も女も色気が必要なければ、働く気もなくなってしまう。だが、色気ばかり多くて、他人の女房と浮気がばれて大騒動を起こすやつもいれば、子供を産ませても放つたらかしの無責任男もいる、やつぱり、道に外れた性欲だけは慎まなきゃいけない」「まったくだ。こうして少しでも社会に役立つために働けることは、ありがたいことさ、それも、若い娘が傍にくると妙に嬉しくなるせいかな。和尚だって若い女性の信者が来ると喜ぶんじゃないかい。」「そりゃ、わしだって嬉しいさ」

「やつぱりそうか、よかった、このぶんじゃ、文さんもなかなか死にそうもないよなあ。」と二人は顔を見合わせた

「俺より十四才も上だ」

# 段取り

あらゆる仕事を始めるには、「一番先にするのは『段取り』」である。大工さんが作る時の言葉である。数年前に家を改築した時、つぶさに、その仕事振りを見た。

家の高さに合わせ、一階から二階までの階段は、コの字型に登って行くようにした。

最初は、若い大工さんが来て、朝から晩まで計算尺を片手に、二階から下へ、下から二階へと、何回もはしごを登ったり下りたりして、柱を墨の線で真っ黒にして帰って行った。

次の日、棟梁がやって来て、まず一階の床から二階の床までの高さを正確に測り、次に家に住む人達の背の高さと歩幅を聞いた。そして、螺旋に近い階段を曲尺でいとも簡単に『段取り』してしまった。「この階段は、一度に上がるより、途中で踊り場を作っておきました。その方が楽に上れるはずです。」棟梁の言葉によると階段の高さは、高す

ぎるとすぐに疲れるし、低すぎると上がり難い。平均的な高さは、十五センチから十八センチの間が一番楽に上がれるそうです。家主は考えてみた。

若い大工はいきなり下から階段の段数を刻んでいたのでもう一度と寸法が余ったり足りなくなったりしたので、棟梁は全長を測り、家族全員の上りやすい高さを決めた上で、寸法の誤差は踊り場を逃げる、ここが若い大工と棟梁の違いである。

設計図を見て、家全体を見る、頭の中でその家を建ててしまおうのである。彼の目の中には、決められた期日に完成した家の映像がはつきり写しだされている。

だから、一目見ただけで「あの木材は柱に」「この木材は天井に」と、指図できるのです。しかし、納期通りに納めるには、いつ着工すれば良いか、もしも期日内に雨が降ったり、悪天候が続いたりしたら、幾日ぐらいいの余裕を見れば良いのか等を予測し見極めて配管工、板金、左官、

ペンキ屋、その他の日程を組むのである。家主もようやく合点がいった。

棟梁とは、何も知った、家で言えば、一番大切な棟と梁である。企業で言う社長は、奥深い考えをもつて若い者を育てなければならぬ遠慮である。

一般的に、ピンと来ないのは「遠慮」という言葉であるがよく誤解している。「遠慮しないで、さあどうぞ召し上がれ」という言葉に惑わされている。

「遠慮」というのは「遠くを慮る」ことである。もし、御馳走を食べたら、「後で大変な事を頼まれるのではないか」と心配する人もあるのです。

昔から「遠慮しなければ近き憂いあり」という警句がある。一年間に色々起きる事件は、誰も予想できない。そんな事件よりも日頃起きる事を忘れている人もいます。ある寺の住職の話し、子僧がいった。「寺の鶏が鳴くことも忘れていたじゃありませんか」

子僧の栄晶がチクリと皮肉を言うのである。

昨年、知人が持ってきたチャボのひよこが可愛いので寺で飼うことにした。はじめのうちは雄雌が分からず、半年ばかり経つと雌が三羽、雄が二羽と分かった。家人に「雄は鳴きますよ」と言

われていたが、住職は雄がいなければ「雌が可哀想じゃないか」と、可愛さに負けて、そのまま成長させて、一年後コケコッコと鳴き出した。「のどかでないなあ」と言

ていたのも束の間、毎朝四時半から二羽の雄鶏が競争して鳴き続ける。ついに近所の医

者から「和尚さん、不眠症の患者達が、お寺の鶏がうるさくて眠れないと文句を言うんです」と言ってきた。それから二ヶ月、二羽の雄鶏の養子

先を探すのに一苦労しました。すなわち、遠慮しなかった為に大いに近所迷惑する破目になったのである。

「お師僧さま、分かりました。後の始末を良く考えて行動しないと、年の暮れになって良い花も悪い花も咲くんですね。それがあの句の意味なんですね」

今年は正月二日目から、栄晶に一本取られたようである。

## 毎日が最高の一日

「日日是好日」とは、その日その日が最高最上のおかげがない一日であり、それを使いこなすところに真実の生き方があると教えるのが日日是好日である。

春百花あり、秋月あり、夏涼風あり、冬雪あり、もし閑事の心頭にかかることなくば、

者から

「和尚さん、不眠症の患者達が、お寺の鶏がうるさくて眠れないと文句を言うんです」と言ってきた。それから二ヶ月、二羽の雄鶏の養子先を探すのに一苦労しました。すなわち、遠慮しなかった為に大いに近所迷惑する破目になったのである。

「お師僧さま、分かりました。後の始末を良く考えて行動しないと、年の暮れになって良い花も悪い花も咲くんですね。それがあの句の意味なんですね」

今年は正月二日目から、栄晶に一本取られたようである。

即ちこれ人間の好時節とある。これは春は夏花爛漫として咲き綻び、秋は月が美しい。夏は涼しい風が吹き、冬は雪があつて清々しい。つまりらぬこと心の中のモヤモヤや過去の思いに引きづられあれこれ思い煩うことがな

かつたら、春夏秋冬、いつでも人間にとって好時節であるというのである。

# 人生の引き算とは

お釈迦様は、「喜びのある人生を送るには、心の持ち方が大事である」と説かれています。

私達の人生は、足し算から成り立っていると思います。

財産があれば、幸せになれる。病気になるれば、薬を飲むと病気が治るといった考え方をします。

果たしてそうでしょうか。故人に財産があれば、遺族が財産分与で争ったり、新薬を飲みすぎて生命を縮めた人達も大勢います。

これに対して、引き算をす



言葉とは、言葉の魂という意味で言葉の不思議な働きという事です。

日頃から、ご婦人のほうが人間が死んでしまうと何もなくなると思っていますが、そうではありません人が話す言葉というものは人の心に多少なりとも残るものだとつくづく

る人は、迷いの心と罪業を消滅させていることです。

迷いには、貪りと怒りと愚かさがあります。これを三毒といいますが、もつとも恐ろしい迷いです。

政治家や官片の役員が激しい欲望で貪り、贈収賄罪で牢獄に入れられるのはこの貪りの心の故であります。

そうした人達は心労に依り病気になるったり、時には早死にするものもあります。また怒りは、人と人との和を失います。

もう一つ、引き算しなければならぬ罪業があります。

人間には、両親や先祖さまがあります。

く思います。

一つ一つの言葉に、それぞれ思いがはいつているから受ける方の側に魂が伝わるのです。相手を傷つけず、喜びを与えるような接し方をしなければいけないと思います。

言葉とは怖いもので人の口から出る言葉ほど不完全なものはありません。たとえば、子供に「勉強しなさい」と言っても勉強よりも遊びを知らな

これらから受け継いできた「業」があり、たとえば家族に束縛される人、養子の家族に生まれた人、不幸にして身体障害を持つて生まれた人、生まれながらにして背負うものがあ、これらを宿業とい

う。良い宿業であれば結構、悪い宿業の場合は断ち切らなければ喜びのある日々は送ることが出来ない。

引き算には、熱心な信仰心が必要です。

朝起きた時、寝る前にはお仏壇に手を合わせご本尊にお参りし、許しをこい悪業を断ち切らなくてはなりません。

引き算には信仰が必要です。い子供も困るし、かといつて遊ぶばかりで「仕事をしなさい」といつても、いつも仕事をせず毎日ふらふらと、なまけているのも困ります。

いかなれば、どんなに千万言を言っても言葉というものは本来、不十分なものである。私達は、いつも慈しみの心で心のこもった言葉を話したいものだと思います。

私達は、いつも慈しみの心で心のこもった言葉を話したいものだと思います。

# 思いやり

人への精神は、他人への思いやりからです。

自分の出来る範囲でにつきり微笑みをかけ、目の前の相手と挨拶を交わしたいものです。

「人間というのは、面と向かってやさしい言葉を聞けば、笑顔を見せて喜ぶし、人づてに聞けば、心に刻んで忘れない」

相手のことを思う心から発せられる真実の言葉は人の心を百八十度方向転換させる場合があります。

どんな人にも、粗悪な言葉を使つてはいけません。

そうした言葉を受けると、その人は粗悪な言葉で返すでしょう。ちよつとした言葉で人を傷つけ、ちよつとした言葉で救われます。

言葉を慎重に選び、できるならば相手を思いやつた、いたわりの言葉をかけた方がいいです。

「口は災いのもと」といいますが、自分の言つた一言が

対人関係を悪くし、しつくりいなくなつたりすることもあります。

相手を思いやり、いたわりの言葉をかけられるようになります。

「ありがとう」「ごめんなさい」「すみません」この三つの言葉が素直に言えるようになれば人生はぐつと楽になります。

ある人を判断するには、その人の言葉によるよりは、行動から判断すべきです。

言葉は良いが、行動は良くないという人も多くいるからです。

話のうまさとは、言葉の操作や話し方ではない他人への愛をこめて、真実を語る事です。

私たちもお互いに幸せになれるよう、いつも優しい言葉をたやさない人になれるよう努力を致しましょう。いつも笑顔でいることは、それなりに難しいことだけど不機嫌な感じにいるよりずっといいです。

本当は、みんな素敵な笑顔を持つているんだよ

